

学会財政の健全化について（報告）

平成二十七年度大会（高岡市）における総会で、学会財政の健全化に関する方針を提案し、承認されたことを受けて、「上代文学」一一五号誌上で全会員に周知致しましたが、以下、その実施状況と経費の節減結果について、ご報告申し上げます。

平成二十九年四月二十一日

前事務局 梶川信行

・大会の臨地研究は必要がある時のみ行なう

三日間の大会を準備し、運営することは、会場校にとって大きな負担である。三日目の臨地研究の準備も大変な上に、参加者が確定するのは四月末日。バスをチャーターしても十分な参加者が集まるかどうかはわからない。また、上代文学にあまり縁のない土地で、コースを組むことが難しい時もある。昨今は、どの大学も休講がでないもので、月曜日の参加が難しい会員も多い。その赤字補てんも含め、学会から大会準備金を支出しているが、それを実施しなければ、少ない準備金での開催が可能となる上に、会場校の負担も減少する。

なお、各自が自由に見学する時間を確保するため、プログラムには「臨地研究」を残しておくが、会場校等の教員が案内することはない。

↓平成二十八年度（支払は二十七年度）から実施。

大会準備金五十万円を四十万円に減額。二年間で二十万円の節減。

・大会の際の資料集を廃止する

資料集の作成は五十周年記念大会に始まるが、通常の大会では参加者が少ないので、一部千円で販売しても、赤字となっている。昨年度は一八万円の経費に対して、収入は一二万円。六万円の赤字だった。また、資料集を作成するために、数か月前に原稿の提出を求めているが、その後、発表内容に変更があるケースも目立つ。版下を作成する大会係の負担も大きい。そこで、かつてと同じように、発表者自身に資料を印刷して持参していただくことで、その経費を節減する。

↓平成二十八年度から実施。赤字ゼロ。

・例会、シンポジウムの会場校謝礼を廃止する

かつては、手伝いの学生たちに教員がポケットマネーで一杯飲ませたりしていたが、それでは大変なので、会場校謝礼が支出されるようになった。ところが、その後手伝いの学生にはアルバイト代も支払われることになった。また、会場の賃借料がかかる場合には、学会が実費の支出もしている。学会の仕事はどのパートもボランティアなので、会場を提供する時のみ常任理事・理事に謝礼が支払われるのは不合理である。そこで今後は、実費とアルバイト代のみとする。

↓平成二十七年度から実施。単年度で七万五千円の節減。二年間で十五万円節減。

・ハガキによる事務局移転の通知を廃止する

事務局が交替する時には、全会員にハガキで通知することが慣例だったが、四月一日に発送する大会案内に新事務局が提示されているので、それを廃止することによって、ハガキ代と印刷代を節約する。これについては、

今年度すでに実施した。

↓平成二十七年に実施。約三万円の節減。

・名簿の作成を四年に一度とする

従来は三年に一度名簿を作成し、全会員に配布していたが、それを四年とすることでその作成費を抑制する。

↓平成二十八年度に作成。約三十五万七千円から約六万二千円に節減。

・会議の時に出席していた茶菓を廃止する

これはすでにこの四月の常任理事会から実施している。年間になると三万円程度の節約となる。会場を提供する常任理事の負担も軽減でき、会議後にゴミも残らない。

↓平成二十七年から実施。一回五千円程度。二年間で四万五千円ほどの節減。

・「上代文学」誌上に広告を掲載する

現在は、会誌、大会案内、ポスターなどの印刷を笠間書院にお願いしている関係で、笠間書院のみ広告を載せているが、上代文学に関係する他社の広告も載せるよう、各社に働きかける。

↓平成二十七年（一一一五号）から実施。一一七号までの広告収入は十五万円。経費を除くと、その八割程度が実収入。

・大会の公開講演会、シンポジウムの際、会員外の参加者から資料代を徴収する

会費を払っている会員の特典として資料代は無料という形にし、会員外の聴講者からは資料代五〇〇円を徴収する。講演会とシンポジウムで一般の聴講者が一〇〇人来れば、五万円の収入となる。

↓平成二十七年秋季大会シンポジウムから実施。

平成二十八年度大会・秋季大会シンポジウムと合わせて、約三万五千円の収入。

・寄付を受け付ける

学会のホームページに寄付を受け付ける旨、告知する。

↓検討したが、控除の対象とはならない可能性が高く、寄付の申し出もない。

・その他、必要に応じて諸経費の削減と、収入の確保を図る

たとえば、郵便で行なっていた常任理事会の案内をメールにするなど、通信費の削減を図る。

(1) 大会参加費の徴収（千円。但し学生を除く）。

↓平成二十九年から実施予定。

(2) 講演料の改訂（五万円から三万円に）。

↓平成二十九年度から実施予定。

以上の経費削減策、収入の増加策によって、学会の財務状況はかなり改善されて来ました。その結果、平成二十七年については、約二十八万円の赤字となりました。しかし、これは『上代文学』に掲載された論文が少なかったことに後押しされた黒字でした。平成二十八年度は、幸いにも多くの論文を掲載することができましたが、その結果として、三三万円の赤字になりました。会員の減少が続いていることも憂慮すべき状態です。また、会費滞納者に対する督促を、例年通りに行なってきましたが、なお滞納者が多く、学会にとって大きな足枷になっています。会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

以上